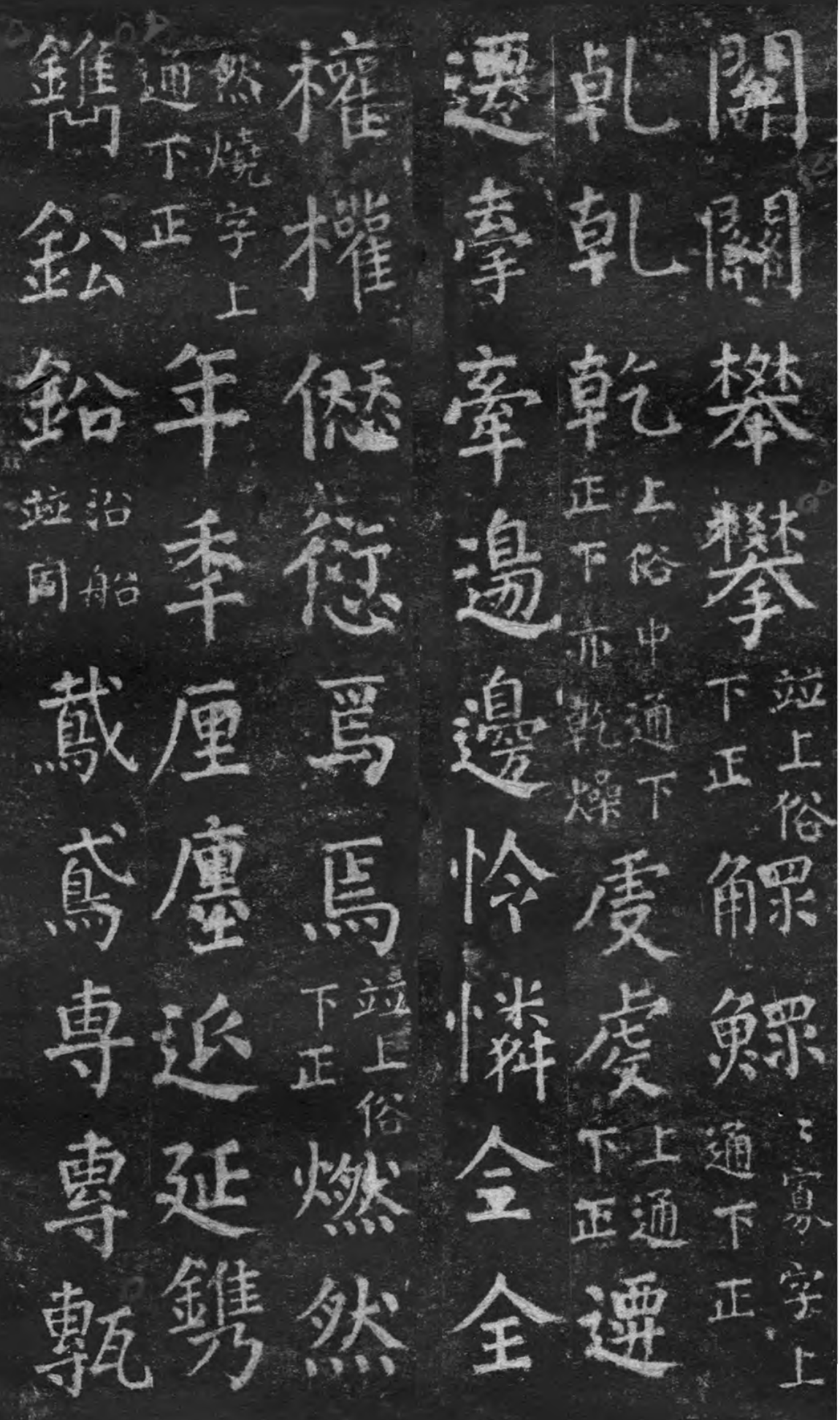
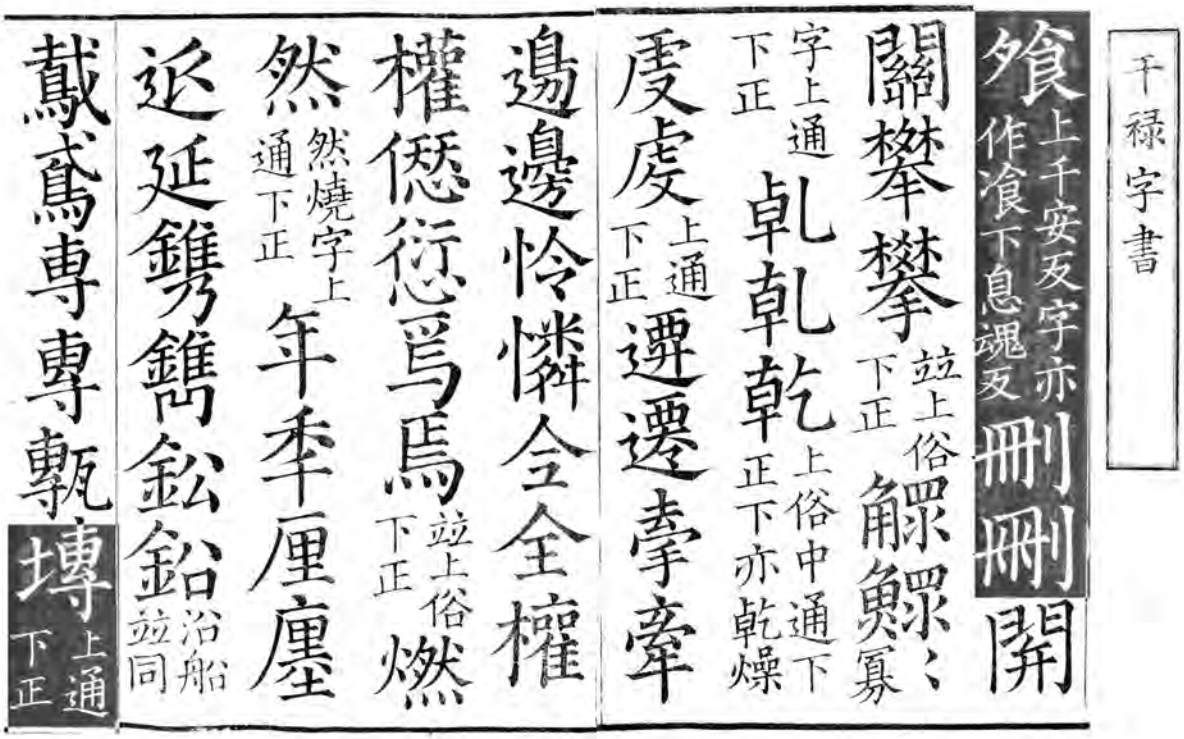


顏氏干祿字書

闕闕攀攀 竝上俗下正 觶觶 寡字上通下正 乾乾 上俗中通下正下亦乾燥 夐夐 上通下正 遷遷 牽牽 邊邊 憐憐 粦粦 全全 權權 僽僽 焉焉 竝上俗下正 燃燃 然燒字上通下正 年年 秊厘 廛廛 延延 鐫鐫 鈆鉛 沿船竝同 戴戴 專專 甎

「顔真卿の書」③
干禄字書
唐・大歴九年（774年）

図②「干禄字書・和刻本」



「干禄字書」とは、顔氏の家系に受け継がれた「字書」である。顔元孫（？～732）の著作である。甥の顔真卿が六十代に書いたとされる。「干禄」とは役人として仕えることであり、役人としての身につけるべき文字知識を記している。右の主図版は、字書の一部である。「乾」「邊（辺）」「全」「権」「年」「延」「鉛」「専」等の字をそれぞれ三つの異なる字形を示しているものには、「上が俗、中が通、下が正」と、二つの字形を示しているものには、「上が俗（または通）、下が正」等と注記を小さな文字で記している。文字の字形に関して、「正字」、「通字（通用体）」、「俗字」の区分を示している。碑刻や行政上の正規の文書などには、伝統を踏まえた「正字」の使用が求められたのであろう。顔真卿の碑刻の小楷としては、最も小さいものであろう。「上俗、中通、下正」などの注記は、一字が五ミリほどの大きさである。この干禄字書碑の原刻は、早くに失われ、模本を基に宋紹興十二年（1142年）八月に重刻された。顔真卿展に示されていたのも宋の重刻拓本であるが、顔真卿の小楷としては、優れた作品である。日本では江戸後期に、この重刻拓本が輸入されて翻刻出版されている。図②は、日本で出版された「干禄字書」である。右頁の拓本部分のみを示した。両者を比較対照して見てください。

伊藤滋（書斎名・木鶏室）

書道芸術院
平成の群像（2019）

町山美扇

小学五年生の時、八街市実住小で種谷扇舟先生の書の講習会があると、母に言われ自転車で一時間近く掛かるジャリ道を、一人で参加した想い出があります。その時「お正月」と書いた赤丸のついた半紙を、いつ迄も飾っておいた事は、今でも鮮やかに想い出されます。

成東高校で、小高映帯先生（書星会）に、授業とクラブ活動で御指導を頂きました。進路を決める時、小高先生より書道科への進学を勧められるも、才能があるとはとても思えず、文学部へ進みました。

しかし、大学でも書道部に四年間所属し、金子清超先生、苔花先生御夫妻に御指導を頂くことになったのは、書くことが好きだったのだと改めて思います。

清超先生は、戦前、西川寧先生と共に書道界で活躍された先生でしたが、戦後の書道界に嫌気が差され、書道界から引退された方でした。「自詠自書」が先生のモットーでしたので、合宿で漢詩を作り、それを大学祭で作品にして発表したり、好きな古典を籠字に取って臨書をする御指導でした。

苔花先生には、万葉集の講義を受け、仮名を御指導頂きました。短い期間でしたが御自宅にお伺いして、折帖で御指導頂いたことは懐かしい想い出です。

卒業後、扇舟先生の門を改めて叩き、入門を許されました。

芸展には漢字と現代詩文書、毎日展には近代詩文書を「出品することが勉強」と言われる儘、手本なしでの出品で無我夢中でした。白扇会のカリキュラムの古典の臨書と、展覧会の作品作りに追われ、もう一枚、もう一枚と雅箋紙の山に埋もれた時代です。

近代詩文書作家協会（現在は日本詩文書作家協会）の創立メンバーであられた先生が、詩文書に絞られた時、漢字部にとお話がありましたが、漢詩が良く分からないことが不安で、詩文書を選びました。

人生山あり谷ありですが、書道が心の杖となり、どんなにか助けられたことでしょう。

毎日展の「第一回書の研修訪中団」の一員に御推薦頂き、初訪中させて頂いた事は、大きな栄誉でありました。漢中・西安・北京・上海。その後、扇舟先生個展の折の山東省の摩崖の旅は、本物を見る感動を味わい、「百聞一見に如かず」を実感しました。

扇舟先生に導かれた現代詩文書は「何を書くか」が大きなテーマです。俳句、短歌、詩、テレビ、新聞、音楽、演劇等、心の琴線に触れる素材を、日々の生活の中でアンテナを張って過ごすことも、楽しみのひとつです。巡り合う感動は細やかでも大切にしています。

扇舟先生の葬儀の折、荒野に一人佇むような不安を抱きましたが、現在は、辻元大雲先生の御指導を頂いています。

ゴールのない書の道を遅々たる歩みですが、臨書と創作の両輪で楽しく学んで参りました。長い年月を続けてこられたのは、巡り合った先生方の御指導、書友の励まし、家族の理解があったればこそと、深い感謝の思いです。

第49回現代女流書一〇〇人展「原コウ子句」　町山美扇書

書のひろば

理事長　辻 元 大 雲

第72回書道芸術院展盛況に

2月6日より11日まで東京都美術館で開催された「第72回書道芸術院展」は、第70回記念全国学生書道展を併催して盛況の裡に閉幕した。

会期中6日、9日、11日の3回、作品解説会が開催され、6日は一般公募、無鑑査上位入賞作品を中心に各部審査主任により行われた。9日は昨年秋季展企画として開催した「書道芸術院の書・漢字」出品の17名の作品を中心に出品者・担当理事により作品論などかなりシビアな内容の作品研究会となった。11日には第1室の役員作品、春華賞・候補作品、大作などを中心に例年通りの作品研究会を行った。

10日午前は全国学生書道展大賞受賞者による席上揮毫会を行った。半紙の部5名と半切½部門の3名、併せて8名、そして院役員を代表して小竹・後藤常務理事、名越審査部長、辻元大雲が参考に揮毫、会場の学生展A賞展示会場は見学者でいっぱいの盛況であった。

同日午後は帝国ホテル富士の間にて、学生展表彰式、72回展表彰式と続き、17時半から報道関係など少数のご来賓のご臨席を賜り祝賀会が500余名の参加により盛大に開催された。

ご祝辞は広田毎日新聞社取締執行役員、田中節山全日本書道連盟副理事長、乾杯は西村毎日書道会専務理事により賑やかに挙行された。

11日午後2時からの撤去作業、12日の搬出も無事終了し主要日程を終えた。関係各位役員の皆様のご協力、ご努力に深く感謝します。（詳細別記）

顔真卿展－王羲之を超えた名筆－盛況の裡に閉幕20日には天皇行幸

東京国立博物館特別企画、「顔真卿展－王羲之を超えた名筆－」は1月16日から2月24日まで開催され、書道関連の企画展としてかってないほどの人気を呼び、王羲之展を越える入場者で大盛況であった。

台北故宮博物院の超一級文物である顔真卿の「祭姪文稿」、唐懐素「自叙帖」「千金帖」はじめ国内外の一級名品が集った画期的な企画展であった。連日長蛇の列が繰り返され、特に「祭姪文稿」の展示室は60～90分待ちが当たり前で、観客の多くが中国人であったことは想定外であったが、台北故宮でもめったに見られない文物であることを考えれば当然であった。

本院では昨年11月23日創立記念日講演会にて、今回企画責任者の東博富田淳学芸企画部長に講演をお願いしたことも実にタイムリーであった。富田先生にはその後会期中に3度も特別レクチャーもお願いしてご迷惑をおかけした。2月20日には閉館後天皇皇后両陛下のご行幸を賜り、本展開催の意義、評価が証明されたことであった。

顔真卿展特別企画展作品

併せて本院下谷洋子常務理事（前期）、辻元大雲（後期）はじめ本企画展特別展示として毎日書道会理事監事の協賛作品が展示されたことは、通常生存作家の作品は展示されない博物館であるが故に実に名誉なことで、感謝感激であり、忸怩たる思いであった。

第71回毎日書道展運営委員会

2月4日(月)第71回毎日書道展の運営大綱を審議する運営委員会が開催され、当番審査員、会員賞選考委員など主要人事、運営大綱が決定した。

・実行委員長　中原志軒(前衛・奎星)
・審査部長　柳　碧蘚(大字・朝聞)
・総務部長　大谷洋峻(近詩・日書美)
(本院関係)
・東北仙台展実行委員長　坂本素雪
・関西展実行委員長　小林琴水
・運営委員（既報）
・会員賞選考委員　辻元大雲、下谷洋子、千葉蒼玄
・当番審査員　加瀬澄春(漢Ⅰ)、半田藤扇(漢Ⅱ)、木村東舟(かⅠ)、大辻多希子(かⅡ)、小竹石雲・坂本素雪・町山美扇(近詩)、稲垣小燕・小浜大明(大字)、大井美津江・岡田琇韻・工藤永翠・田守光昭(前衛)
・審査副部長　大井美津江(前衛)
・陳列副部長　知野洛水(前衛)
・入落担当主任　勝山初美(かⅡ)
佐久間幸扇(近詩)

2019毎日書道展新会員作家展

本年度第71回展より会員に昇格される作家の展覧会。（　）内本院関係。ご高覧を。

・会場　アートサロン毎日
・第1期　3月4日～9日
(小川白柳・竹浪叙舟・桐岡銘紀・岩上郁子・小此木白洋)
・第2期　3月11日～16日
(中川紅蘭)
・第3期　3月18日～23日
(利村郁子・佐藤華炎・千田春月)
・第4期　3月25日～30日
(藤原三枝子・松本泰泉)
＊祝賀懇親会　3月15日(金)18時
毎日ホールにて開催。

21世紀の書

―私の主張―

漢字(六)

飯田春香

臨書と鑑賞

「私の主張」も最終回となりました。ここで臨書の大切さを記したいと思います。師である恩地春洋先生から事あるごとに「臨書をしいや」と言われてきました。書を始めたとき、京橋教室で臨書の木曜講座ができました。第1期生として、耳慣れない古典の法帖に戸惑いながらも3年間皆勤で勉強しました。そのお蔭で大方の古典を一通りわかるようになり感謝しています。

大字書はまだ歴史が浅い現代書です。少ない文字の為、安易にならないよう書体も幅広く取り組みたいものです。今は「書譜」をもう一度最初から勉強することになり、塾生全員で協力し、昨年の「秋の春洋会書展」で全臨し発表しました。そして、その年の毎日書道展に「通」を発表しました。行き詰まったら臨書に戻れとよく言いますが、全くその通りだと思います。

最後に鑑賞の仕方。私は色々な作品を観るとき、その作品から一瞬に何を感じるか、その作者の制作意図や感情を想像したりしますが、なかなかわからない方が多いです。要は見る側の記憶に残るか否か、すーと通りすぎるだけか、もう一度引き返してみてみたいと思うかどうかだと…。

私は今後の制作目標として、心にそして記憶に残る作品をと思っています。

第69回毎日書道展「通」　飯田春香書

前衛書(六)

嵯峨大拙

最終回となりましたが、この作品は平成28年第68回毎日書道展、東北仙台展実行委員長として、せんだいメディアテークにおいて席上揮毫した3枚のうちの1枚です。題名は「翼」。現代にもっとも近い甲骨文字の線を、モチーフにあえて平刷毛を使用して書いた作品です。この作品を制作して感じたことは、今後芸術文化の果たす役割がますます大きくなるのだということです。芸術の力を信じ、揺らぐことなく芸術文化活動を着実に続けていかなければと、覚悟を決めております。

「翼」　嵯峨大拙書

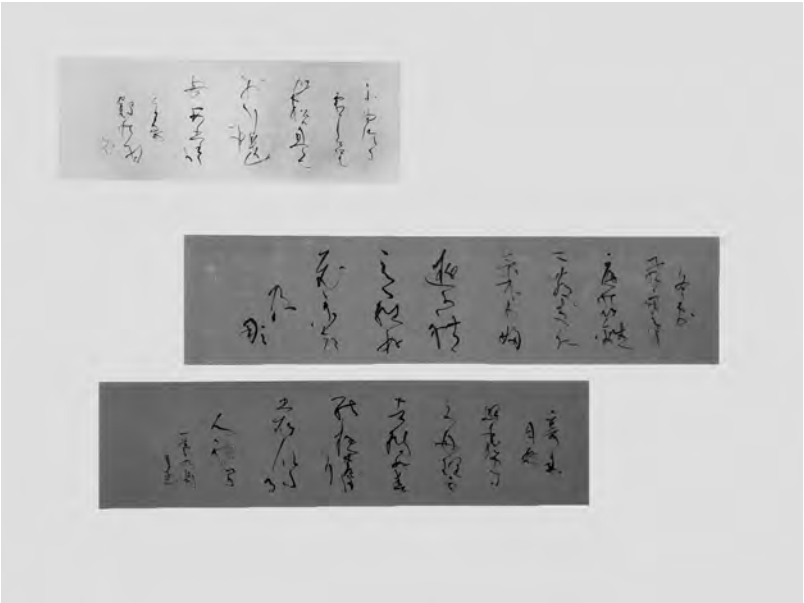
顔真卿－王羲之を超えた名筆－

～「古典を受け継ぐ現代の書―世代をつなぐ筆墨の美―」展～

東京国立博物館　平成館１階に展示

辻元　大雲　　「太田水穂の歌」

釈　　文：白箋にはじけて匂ふ墨の香のつばらに黒し花よりもなほ
製作意図：顔真卿の重厚な書風を思い浮かべつつ、書の魅力を詠んだ短歌をお借りして揮毫してみました。意を尽くせぬまま未消化の作となり汗顔の至りです。



下谷　洋子　　「霜しろき」樋口一葉の歌

釈　　文：冬鶴　霜しろき山松がえにおりゐてもあたゝかげなる鶴のは衣
冬花　風寒き庭のまがきに咲にけり冬がれしらぬひゝらぎの花
寄春月戀　照もせずくもりもはてぬ春のよの月にも似たる人のこゝろか
製作意図：顔真卿と同世代に生きた懐素は良寛にも影響を与えた。懐素の自叙帖の直線と曲線の呼応にかなに近いものがあるため、今回好きな自叙帖でその仙気溢れる雅趣を念頭に置いたが、自在で奔放な中の格調にはほど遠かった。

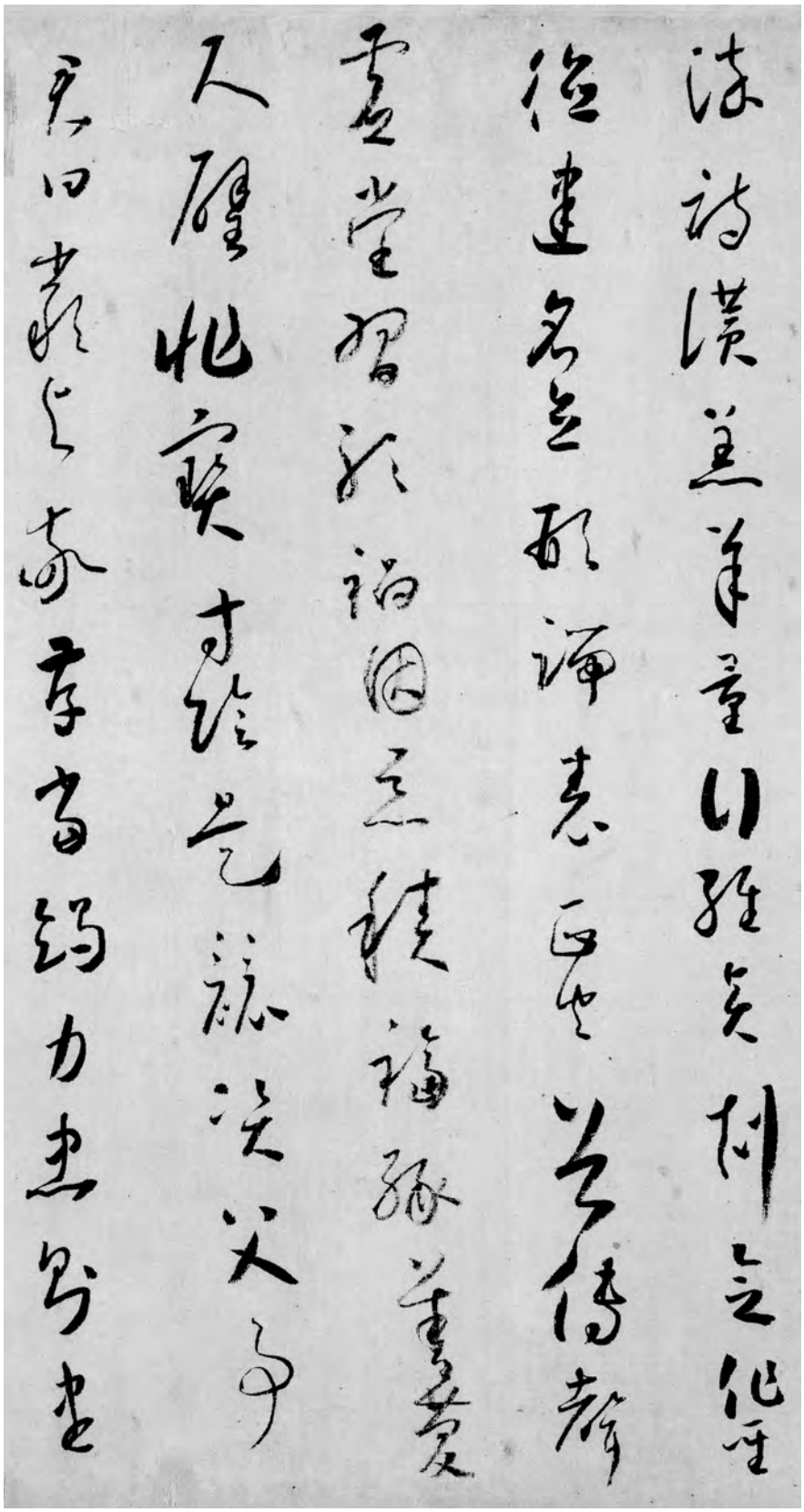
古典鑑賞 ㊻

草書千字文（千金帖） 唐 懐素 ③

漢字研究部臨書課題 ＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の左記掲載部分以外も可。

〈解説〉懐素は、幼い時に仏門に入り、修業の傍ら書の稽古に励んだ。貧乏で紙が買えず、芭蕉を植えその葉に書き、それが尽きると漆を塗った板に書き、ついに板に穴があくまで手習いしたという。従兄の鄎彤や親交のあった顔真卿から張旭の書を伝授された。自らも、風まかせに変化する夏の雲の多様な姿を見て、草法を悟ったと伝えられている。懐素は張旭のあとをうけ、狂草をよくしたことで名を知られ、世に「張顛素狂」と併称されている。後世、懐素から影響をうけたものに高閑（唐末の僧侶）五代の楊凝式・宋代の黄庭堅などがいる。日本では良寛が自叙帖や草書千字文を好んで学習したといわれている。（編集部）



（掲載図版77％に縮小）

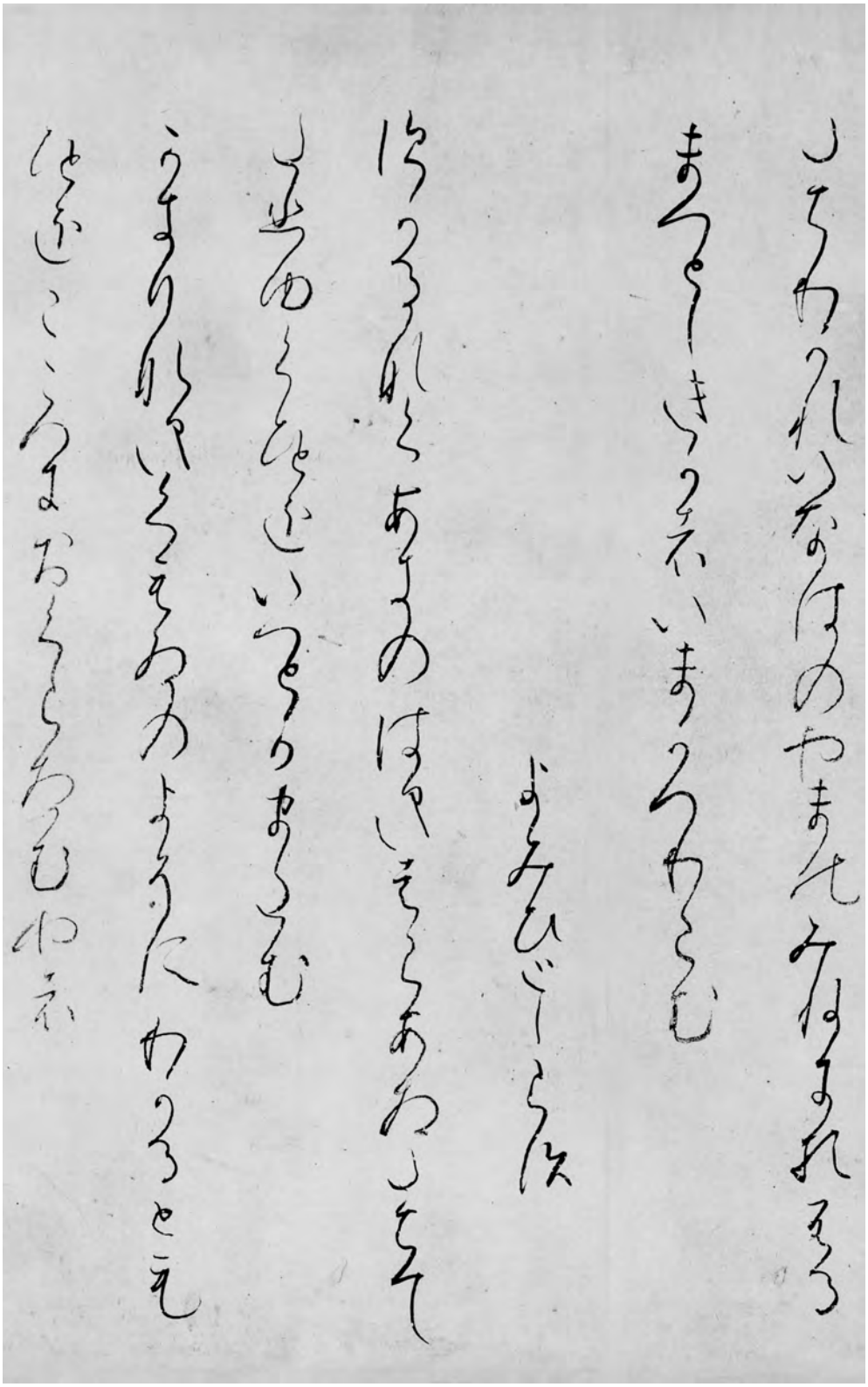
※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

淬。詩讃羔羊。量行維賢。剋念作聖。德建名立。形端表正。空谷傳聲。虛堂習聽。禍因惡積。福緣善慶。尺璧兆寶。寸陰是競。資父事君。曰嚴與敬。孝當竭力。忠則盡

古筆鑑賞

高野切第二種（伝紀貫之）③

⑱⓪



（毛利博物館蔵）

〈よみ〉

たちわかれいなばりやまのみねにおふる
まつとしきかばいまかへりこむ

よみひとしらず

すがるなくあきのはぎはらあさたちて
たびゆくひとをいつとかまたむ

かぎりなきくもゐのよそにわかるとも
ひとをこゝろにおくらさむやは

〈解説〉高野切第二種と同筆と考えられている遺品には、伝紀貫之筆桂本万葉集、伝藤原行成筆雲紙本和漢朗詠集・関戸本和漢朗詠集などがある。平等院鳳凰堂の中宮内に『観無量寿経』の経文を書いた平等院鳳凰堂扉絵の色紙型もその一つである。平等院に伝わる『真名本平等院旧記』に、色紙形は源兼行（1024―1074）の書と記述されている。また兼行の自筆の書状が発見されたことにより、右の一群の古筆が兼行の書であることが確認されている。つまり、高野切第二種は平等院が建立された頃を頂点として活躍した源兼行が執筆したもので、「高野切本古今和歌集」は、11世紀中頃の筆と考えられている。（編集部）

※掲載図版は80%に縮小。

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

かな研究部 臨書課題（半紙普通判（**料紙可**）・**縦長**に使用）
別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。
上記の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。**（全臨も可）

特別研究部 臨書課題（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）
上記の掲載以外も可。

漢字規定　初段以上【四月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

辻元大雲選書

梅動雪前香　よみ（梅は雪前に動いて香し）

書体＝自由

習い方解説（六）

辻元大雲

梅動雪前香
（梅は雪前に動いて香し）

前回に続く対句の後半です。今回はやや重みのある隷書表現としました。羊毫中長鋒を使用しています。隷書表現といっても書風により様々に変化します。今回は安定感を出すべくやや太目の表現です。

隷書表現は蔵鋒、逆入平出、水平、横広といった用筆、字形の特徴があり、その基本的な用筆法を身につければ割と簡単に表現出来るようになります。起筆の筆を逆入させる蔵鋒はしっかり身につけましょう。そして収筆の平出、更にどっしり力強い波磔表現も隷書表現の基礎基本です。右上がりにならない水平の字形と、横広の安定したスタイルも大きな特徴です。

今回まで主に行書、草書、隷書と三書体の参考例でしたが、他の書体も是非挑戦してみてください。

漢字規定　秀級以下　【四月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

広瀬舟雲選書

池水盡墨　よみ（池水盡墨）

書体＝楷書

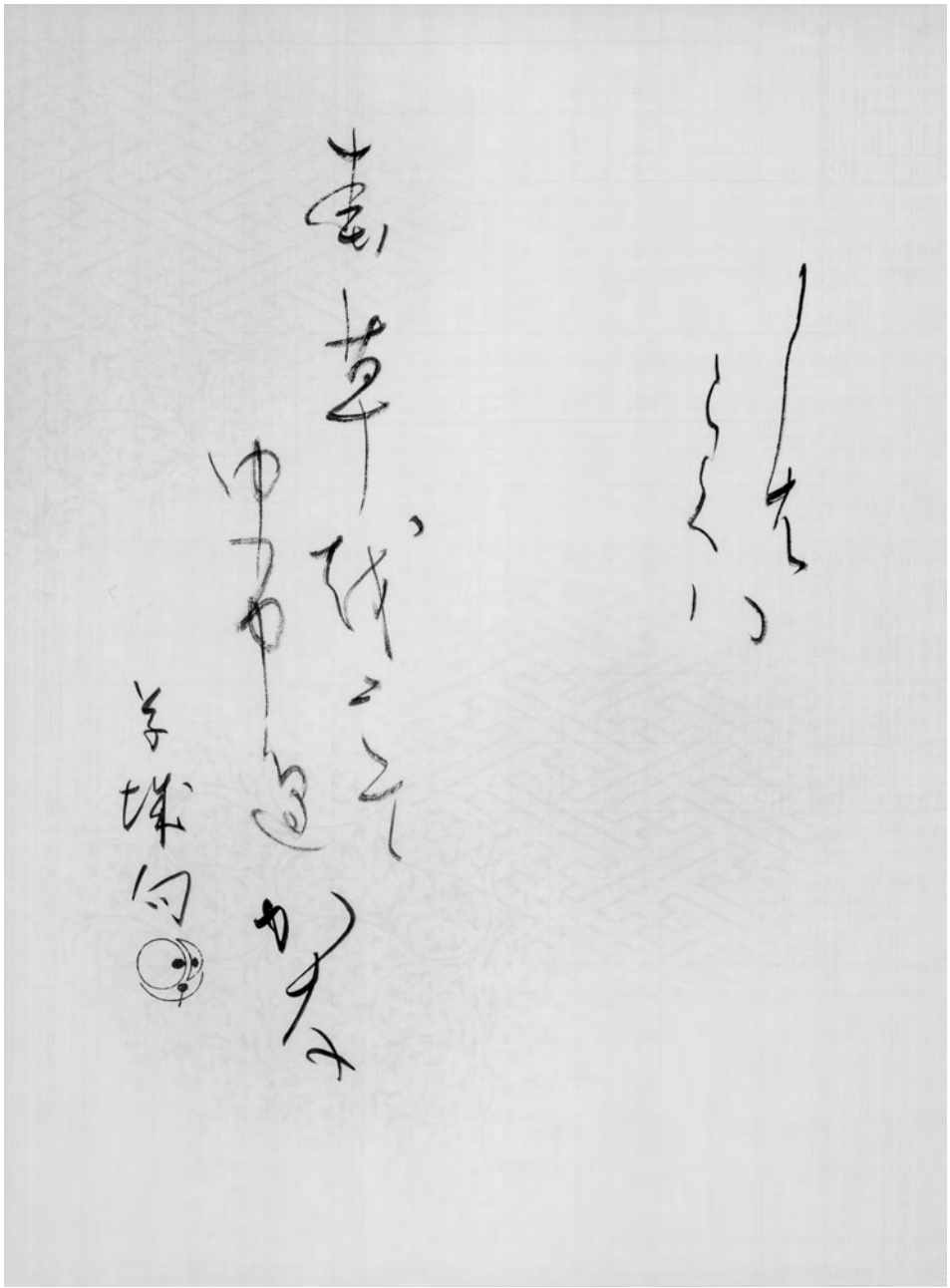
習い方解説（六）

広瀬舟雲

池水盡墨（池水盡墨）　（『書譜』）

いよいよ私担当の最終回。欧陽詢の書法で書いてみました。右側2文字の外形が、ほぼ円形なのに対して、「盡」・「墨」は、かなり縦長の方形でかつ画数が多いので、配字バランスが少々難しいかと思います。各文字の重心がどこか探してみてください。これがコツのヒントです。「盡」が書きにくければ新字体の「尽」でも結構です。墨は「くろい」とも読みます。この言葉は、『書譜』の張芝・鍾繇・王羲之・王献之の書を比べた章に出てきます。書道を一生懸命勉強したので「池の水が全部真っ黒になった。」の意です。いにしえの達人は、池の水が黒くなるまで鍛練したといいます。下水道が整った現代では無理かもしれません。ですがこの心意気は受け継ぎたいものです。ありがとうございました。

かな規定　初段以上【四月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判（料紙可）　石井明子選書



よみ方　しば(者)らく(久)は(八)春草を(越)み(三)てゆふ(布)べ(邊)かな(奈)　草城句　創作

習い方解説 (三)

石井明子

しばらくは春草(しゅんそう)を見(み)て夕(ゆふべ)かな
（日野草城）

ぼんやりと春の野辺を見ているが、匂うような春草にひきかえ、心は春の愁いに沈(しずん)んでゆくとの意。季語は春草。

大きい国語辞典で、あらためて短歌と俳句を調べてみましょう。文字数の差だけではない違いがわかりません。

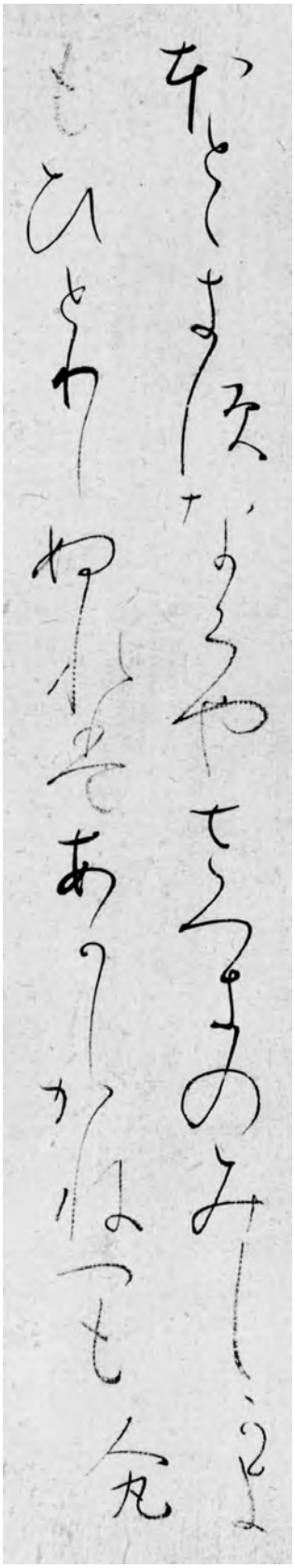
作品にするときは、字数の違いが最も意識されますが、それだけではない表現の違いにも迫りたいものです。雰囲気も大切です。

短歌を書くときより、少し大きめの筆を使ってみましょう。構成によりますが、墨継ぎなしの一筆書きも試してみましょう。

文字の練習の一つの形ではありますが、伝わり易さを念頭に、しかも自分の主張を十分に込めたものに仕上げて下さい。

かな規定　秀級以下【四月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿）を臨書する。



粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大120％）

よみ方　ほ(本)とと(ゝ)ぎ(支)す(須)なく(久)やさつき(支)のみじか(可)よ
もひとり(利)しぬれば(盤)あか(可)しかねつも　人丸

かな条幅規定【四月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

松村くに子選書

よみ方　静さ(佐)に(耳)堪(堂)えて水(みつ)澄(すむ)た(多)に(尓)しか(可)な(奈)　　〇〇か(可)く(久)　創作

習い方解説 (三)

松村くに子

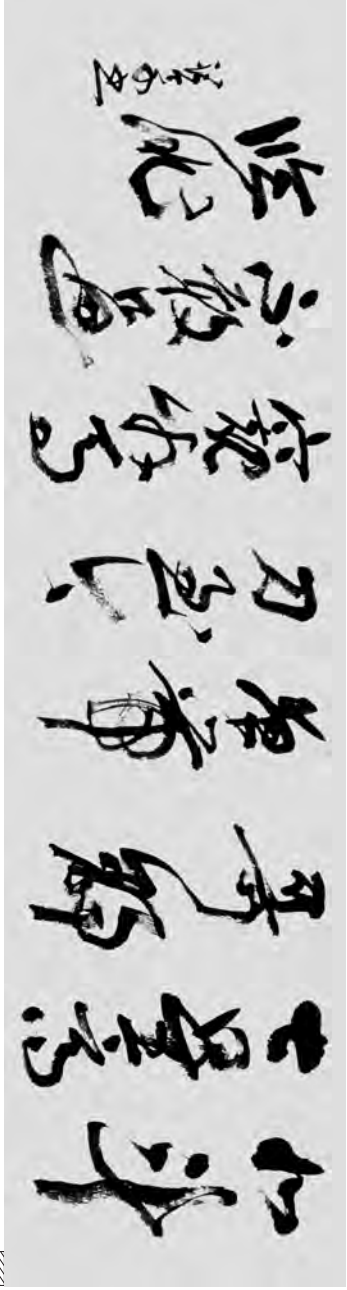
静さに堪えて水澄たにしかな
（与謝蕪村）

俳句は字数が少ないので字配りには苦労します。今回は、行を寄り添わせて行尾をずらしました。下部に余白ができたため落款を書きましたが、この場合名前も作品の一部と捉え作品全体のバランスに合うよう字の大きさ、位置など工夫が必要です。

または、ここに「蕪村の句」と書き入れるのも良いかと思います。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【四月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切



小林琴水選書

北斗七星高　哥舒夜帯刀　至今窺牧馬　不敢過臨洮
（北斗七星高し　哥舒夜刀を帯ぶ　今に至るまで馬を牧せんと窺うも　敢えて臨洮を過ぎず）
（哥舒歌・西鄙人）

書体＝自由

出品券貼付位置

漢字条幅規定　秀級以下【四月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

千葉蒼玄選書

天朗氣清
（天朗かに気清し）

書体＝自由

習い方解説（六）

小林琴水

最終回、横書きです。文字の大小、横への広がり、流れをつけることが大切です。あまり強弱はつけず、淡々と書きました。横書きは大変難しいです。文字が小さくならない様に、動きを大きくすることに心がけて書きましょう。

※ヨコ形式に限る

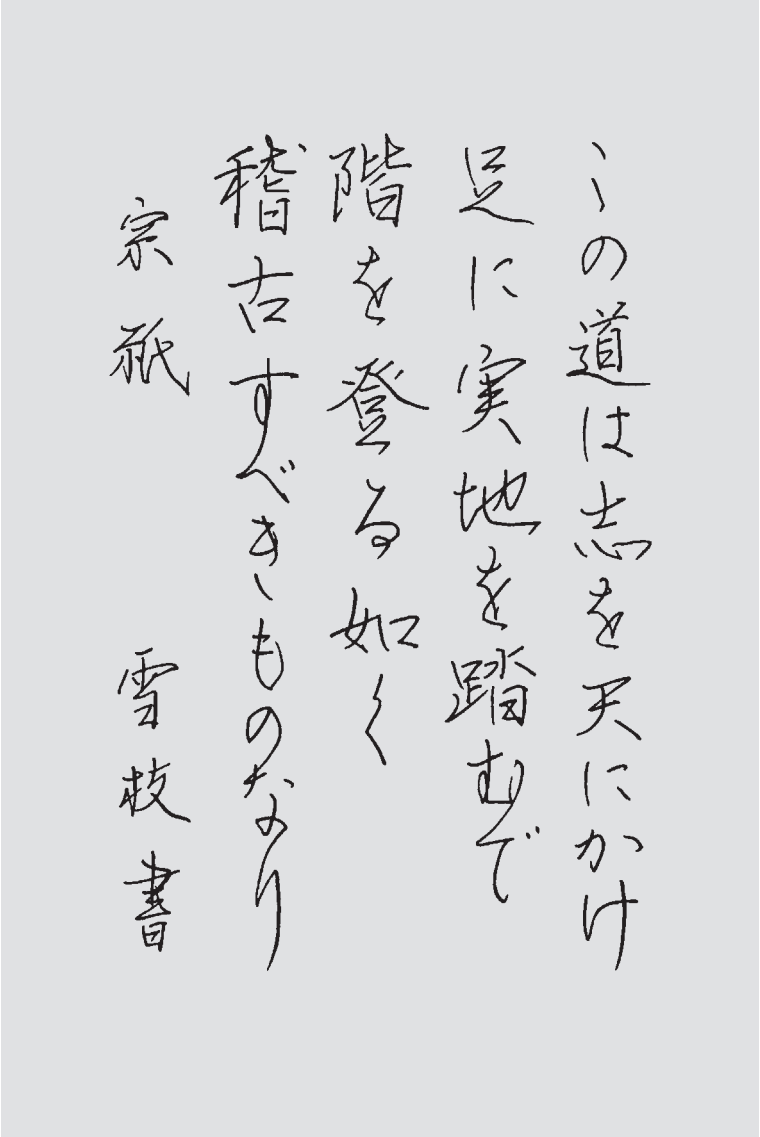
習い方解説（六）

千葉蒼玄

今月が最終月、天朗らかにして気清し、まさに三月を象徴するような気候です。のびのびとおおらかな雰囲気で書きたいものです。「蘭亭叙」は、王羲之が脩禊事（厄払）を行った時の序文ですが、暮春之初とは三月の初旬の事、現在の三月三日、日本では形が違ってしまいましたが、ひな祭りにあたります。

ペン字規定【四月十五日締めきり】

見越雪枝選書



用紙＝はがきの大きさ（14.8×10㎝）、白色のもの、**黒インク**使用のこと　・階（きざはし）　書体＝自由

習い方解説（六）

見越雪枝

今回で最終回となりました。

字配りよく書く為に紙面の中で、①文字の大きさ②余白の取り方③字間の取り方④行間の取り方、字形の整え方を6ヶ月で説明してきました。

ペン字規定のお手本は、殆ど原寸大なので、1行の中で文字が入らないという事はないように思います。

紙面に対して調和（字配り）を大切に作品を仕上げて下さい。

広瀬舟雲先生が『書道芸術学生版』の「書写を知り学び楽しむ」に書写教育に関することを執筆されています。普段何げなく書いている文字に、新しく発見する事ばかりです。大変参考になります。機会がありましたら是非一読下さい。

今回は金言、宗祇の言葉です。自分に言い聞かせつつ仕上げました。

※落款（自分の名前）を必ず入れる。

今月のホープ作品 各部総評

NO.693

漢字部　師範　高津　谷麗

切れ味鋭い筆致が爽快な雰囲気を生み出し、明快な作。軽やかな運筆は日頃の修練を物語る。

◎漢字部総評　上級参考例による草書表現に誤字多し。特に「舞」の点画不足が目立つ。字典などでしっかり調べる努力を。（大雲評）

かな条幅部　準師範　吉田千鶴子

渇筆のリズムにのった動きの大きさがよい。反して潤筆は硬く少々物足らないが、期待抱かせる作。

◎かな条幅部総評　特に変体がな・餘の誤字が多かった。また歌の読み違いもあり残念。書き初め漢字の時はやゝ小さめに！（洋子評）

現代詩文書部　特選　梅田　紅雨

潤渇、余白など序盤から終盤迄よく計算されている。熟達したものがある。

◎現代詩文書部総評　誤字や押印のない作品は評価は下がる。常に心したい。（梓江評）

前衛書部　特選　神谷　翠蘭

リズミカルな運筆で生まれた線と造形は、明るく心が癒やされる。作者の心情が滲み出た作である。

◎前衛書部総評　発想の展開と表現の技術力が伴わない作が見られた。更なる努力を。（蓮紅評）

漢字条幅部　師範　田玉　哲子

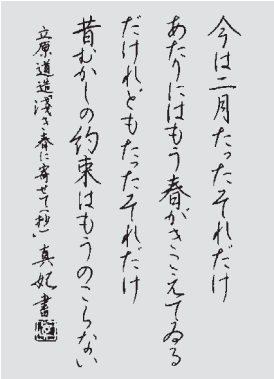
線が淑やかで、味わい深く上質。余白も美しい。ゆったりとした心静かな境地が窺える。品性高い。

◎漢字条幅部総評　上級は草書に誤字が多く見られた。正しく標準的な字形を用いて欲しい。文字資料を作り、草稿作りを。（萬城評）

ペン字部　師範　鴨下　真妃

清々しく毛筆を思わせる作風です。漢字とかなの調和良く、紙面構成、行間の響き合いが群を抜く。

◎ペン字部総評　行によって文字数が異なった為、字配りに苦労した後が垣間見られた。丁寧に取り組む姿勢に好感。（雪枝評）



かな部　師範　松丸　愛石

丁寧な学習で手に入れたものを気負いなく表現して美事な作。作者の心の有り様が穏やかに伝わる。

◎かな部総評　変体がな累の曖昧な字散見で残念。一部を除いて字が過小のための貧弱な作が多く、バランスを再考したい。（明子評）

今月の

特別研究部優秀作品（特選）

選評　辻元大雲　白石和楓　木村東舟　倉林紅瑤

漢字（もくせい会）西川藤象「有感」

西川藤象書

175×55㎝

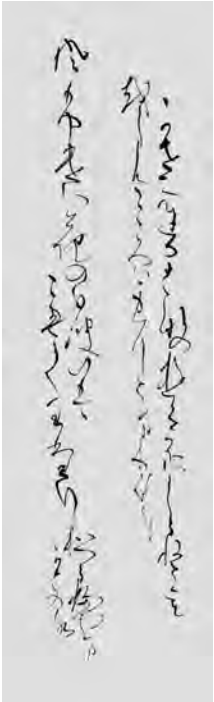
◆リズムよく流れる表現がのびやかさも感じさせて妙。もう少し骨力ある線質があれば尚。（大雲評）

◆筆圧の変化があり、線の強弱で全体のバランスがとれている。余白も美しく、躍動感ある作品になった。（東舟評）

◆連綿がいつもながら達者で、流れが美しく明快さあり。中央の行にもう少し墨が入った作品も見たい。（和楓評）

◆巧みな筆さばきと軽妙なリズムが魅力。文字の大小・太細・潤渇の変化に富み、空間構成も美しく明るい。（紅瑤評）

かな（大辻会）根本雅子「山家集2首」



根本雅子書

174×52㎝

◆全体に温かみある作品。墨色もよく、ゆったりと伸びやかな構成。墨量のある山場があれば更によいと思う。（東舟評）

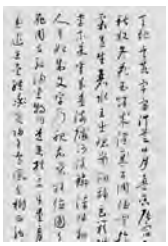
◆運腕を広く取りながら筆線に骨力を感じる。縦5行の布置も美しく、落款までゆるぎなくまとまった。（和楓評）

臨書（千葉）竹浪叙舟「草書千字文（千金帖）」

竹浪叙舟臨

55×173㎝

部分拡大



◆原帖の枯淡な味をよく観察し、味わい深い臨書。やや紙面いっぱいに広がりすぎた感あり。（大雲評）

◆原帖の特徴をよく捉え、穏やかな中にも全体に緊張感が漲る。最後まで一貫した全臨作品に敬服。（和楓評）

◆安定した運筆で、「天地玄黄（てんちげんこう）」から「焉哉乎也（えんさいこや）」までの1000字を全臨。最後まで集中した臨書態度すばらしい。墨色、布置は一考を要す。（紅瑤評）

◆2×6尺に全臨。原帖の運筆にゆとりのある特徴をよく把握し温み感あり。紙面上下左右に余白がほしい。（東舟評）

◆小気味よいリズムが紙面に動きを与え、全体構成も自然でバランスよくまとまっている。（大雲評）

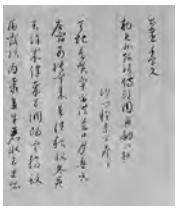
◆自然な運筆で、軽妙なリズムが快い。紙面構成も安定感があり、爽やかな紙面を醸し出している。（紅瑤評）

臨書（紅瑤）金井みどり

「草書千字文（千金帖）」

金井みどり 臨　　70×135㎝

部分拡大



◆深黄色の紋箋の色調を生かし、行間のゆとり、柔らかな線質がよく調和している。深味ある作。（大雲評）

◆細かく古典を観て、丁寧に書かれている。余裕があり、明るい作品。墨量の変化が自然な流れを出している。（和楓評）

◆運筆に終始一貫乱れること無く見応えのある臨書。墨の潤渇もよく表現し、安定感あり。（東舟評）

◆色紋画仙に、「千金帖」の平淡な美しさを丁寧に表現した臨書作。さらに原帖観察をし、細部の特徴を追求しよう。（紅瑤評）

前衛書（白珠）西山葵龍「勢」

西山葵龍書　　175×60㎝

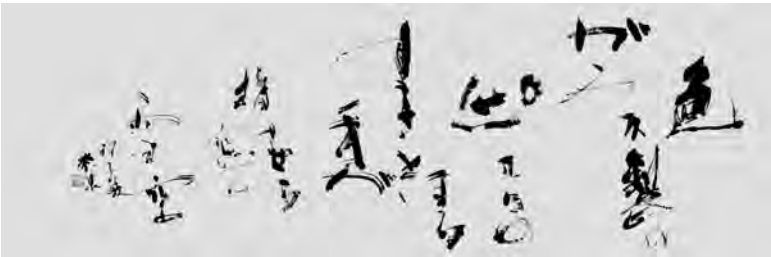
◆重厚かつエネルギッシュな筆致で紙面に豪快さが漲っている。余白が冴え存在感のある快作。（紅瑤評）

◆濃墨で大胆な筆使いに魅力を感じる。上から真ん中への動きが素晴らしく、最後のまとめが心憎い。（和楓評）

◆厚味ある重厚な筆致が紙面に大きな動きを与え、スケールの大きな作となった。期待大。（大雲評）

◆粘り強い線の重みで勢いが伝わる力強い作。余白を生かし墨塊と白のコントラストがすばらしい。（東舟評）

現代詩文書（八戸）市川紫泉「田宮明子の歌」



市川紫泉書　　60×180㎝

◆渇筆を生かし、太細のバランスが良く、横への懐の広さもある。後半の3行目からやや軽く感じる。（和楓評）

◆紙面に散らした表現が楽しいリズムを醸し出している。書き出し、ややバランスを欠いたか。（大雲評）

◆リズミカルなタッチ。構成大胆でスケールの大きさを感じる。後部にも潤筆部分有ればと思う。（東舟評）

◆文字造形に工夫を凝らした味わい深い作品となった。右前半部の紙面構成一考を要す。（紅瑤評）

総出品点数 68点

創作の部（36点）
漢字―6点
かな―5点
現代―12点
篆刻―0点
前衛―13点
臨書の部（32点）
漢字―30点
かな―2点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
八街 熊谷 桃華
杏苑 松永 杏苑

「かな」
宗苑 茂木 絢水
如月 治田 芳江

「現代詩」
千葉 平野 笛舟
陽陽 岩崎 陽光
麗澤 秋山 之扇

「前衛」
松風 西條 松雲
玉州 角張 芳蘭
大拙 荒木 孫功

（臨書の部）

「漢字」
英峰 佐藤 桂香
千葉 猪又 理扇
もく 森田 藤谷
大雲 名取 美紬

「かな」
千葉 松重 翠景

漢字研究部
（草書千字文）

選評　川島舟錦

今月のホープ作品

田中一葉

漢字研究部　特選　田中一葉

草書千字文の課題を、伸びやかに若々しい感覚で臨書されています。運筆の緩急、抑揚など巧みで筆路も明確、4文字が紙面にピタッと入りました。線質について、意識されるとさらに趣のある書になるはずです。

◎漢字研究部総評

平淡で老練な域に達した、懐素の草書千字文の臨書は、容易ではなかったと思います。受け取り方や表現方法は様々で、どの角度から切り込めばいいのか悩んだであろうことが作品から窺い知ることができました。

今、パソコンを開くと何人もの方の筆を使う様子を、動画で見ることができます。指導者の先生からもまた、ヒントがいただけるはずです。運筆の勢いやリズムの変化、線の深さなどを追求し続けたいものです。

霞花　翠風
美智代　紫心
紅苑　麻衣子
景峰　洋子
竹葉　良子
祥扇　雅悠

景泰峰子
松雲　登志子
杏邑　奎媛
恵美泉　奎心
裕羊　恵美山

かな研究部
（高野切第二種）

選評　庄司紅邨

今月のホープ作品

小峰　美加子

かな研究部　特選　小峰　美加子

高野切三種類のうち連綿の斜めの線が強調されているのが「第二種」です。特徴をよく捉え、文字間の響き合いも心地よく、風格のある作品です。

◎かな研究部総評

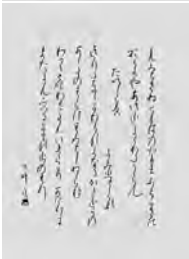
書き慣れた高野切なので、形や線質は全体的に特徴をよく捉えています。さらに、一歩踏み込んだ臨書として、墨量、線の向き、流れに注意して欲しいです。

良泉　美代子　紅霞

寿美子　千峰　和子

芳枝　美代子　幹生

春華　和子　松春子



かな研究部成績表

特選

高崎美加子　小峰美代子　後藤良泉　関根美紅子　玉川寿美子　橋本翠　田畑千峰　長谷川和子　紅松芳枝　風谷幹生　田口高澄　清水春　月真　境野宇　関口安　椿高飯　蕙翠美　うるる　澄春　立千　正鷲　京近　高榎　高井　橋書　井華　橋沼　桜田　草宇　春井　草代　澄木　春真　苗梅　明田　月安　連沼　明小　蓮田　月高　運田　明宇　伯田　陵田　春田　か嶋　翠眞　精砂　華田　か木　翠山　橋田　泉高　橋本　泉水　雲木　伯本　陵木　月真　蓮貴　明真　春勇　蓮龍　明佳　宝子　宝心　か実　陵麗　か恵　か山　翠生　橋子　泉子　雲子　月郷

秀作（60音順）

東大　高正　竜誠　卯岩　青玉　黎渡　澄正　桜辺　たか　椿華　立和　正泉　京雲　高沼　椿松　蕙　清　玉　玉　蝿　葵　高　東　高　竜　卯　青　黎　澄　桜　たか　椿　立　正　京　高　澄　うる　椿　蕙　清　玉　玉　蝿　葵　高　伯　陵　泉　月　蓮　明　春　草　か　翠　精　華　橋　井　春　翠　書　月　真　松　風　谷　川　寿　峰　子　枝　子　峰　美　代　子　霞　本　泉　子　崎　美　加　子

大沢　鵜澤　鵜村　今貝　磯崎　石木　青木　山本　會木　泉水　高橋　沼田　小田　宇井　苗代　梅木　安嶋　千眞　鷲田　近沼　榎藤　宇田　飯田　高川　藤美　安　関口　芳野　和谷　長川　田寿　畑美　本子　関根　美　後藤　良泉　小峰　美加子

淳子　李名　琴舟　貴泉　清耀　正子　葵郷　真紀　勇介　龍宝　佳子　奎心　愛実　楠麗　佳恵　篁山　玉子　香生　白子　将太　松春　和子　春華　幹生　代子　芳枝　和子　千峰　美子　紅霞　代子　子泉

佳作（60音順）

松村　京橋　昌苑　華仙　調布　中川　墨宣　石習　黎明　華仙　蘭鼎　一弦　高か　陵　氷か　た堅　玄穹　玉松　旭老　澄春　弘原　蒼花　墨葉　若汀　詢真　大雲　う宮　梓韻　蘭江　大鼎　雲　正華　鷲春　白か　椿華　乙幡　大島　昌子

青木　吉田　吉田　山口　武藤　三田　真庭　松タ　松丸　前田　林川　早坂　浜野　丹羽　永羽　樋井　千泉　田葉　高中　高橋　鈴木　渋谷　齋由　小美　工藤　工山　草香　木眞　川幸　川睦　片元　加崎　山心　瀬美　明恵　日風　智夏　乙美子

玉枝　佑子　翠綾　雪翠　蔦睦　蒼舟　愛ミ　綾石　瑛香　雅仙　朋子　永香　恵篁　悦子　雪子　陽篁　耶子　真衣　幸薫　睦苑　渋心　舞夢　智子　山房　香蘭　眞華　順子　栄仙　優子　恵風　日夏　智美　昌子

入選（60音順）

もく瑤　紅　大阪　生　ふみ　華仙　黎明　華仙　白鷺　桜草　高崎　長月　大澄雲　長春　長月　椿翠　大前雲　東橋　上向泉　大阪　天瑞　耕雲　千葉　春汀　高真　一宮　琉韻　宮城　祥紫　澄春　正華　硯か　蒼水　大陽　附中　伏華　立阪　東精　樹原　青蓮　もく　中川　た川　久か　誠賀　〃　八街　A I　正華　高崎　京橋

新井　天羽　青木　青多　藍澤　吉田　山本　山中　柳瀬　森谷　松本　松百　増浦　堀田　深切　平堀　平さ　日か　春っ　畠山　中高　中山　中西　土里　戸井　渡村　鶴子　鶴淵　竹内　鈴木　杉田　新内　柴行　猿田　佐渡　佐々　込木　黒山　國柳　岸峰　菊地　菅野　葛野　小野　岡部　大島　梅津　岩佐　入ノ　井口　井上　伊藤　石川　飯島　東知

翠　恵富　藤美　松和　白美　琉子　蓮　楓子　紗　奈津　友香　合子　玉江　佳子　幸雲　清洗　だ子　右真　勝香　芝子　北子　弘枝　博舟　紀子　亜希　雅裕　智恵　昌子　睦子　瑞華　洋子　篁右　雅芳　美艸　竹葉　琴翠　民子　白雅　静代　恵美　朱星　藤美　竹瓊　久子　祥苑　悠花　峰　春雲　芝子　寿子　津子　律子　花子

紅瑤　旭老　土貴　富和　誠葉　千生　八拙　八汀　春彩　光雲　蔦書　昌宛　高崎　〃　澄春　英峰　大樹阪　翠原　奥吟　春田　こ生　〃　大雲　文筆　高華　千葉　華仙　広島　附雲　澄中　春こ　こ祥　華春　澄春　青峰　書游　大阪　明漢　伏華　澄春　梅桃　正華　高真　A I　澄春　花舞　華祥　有秋　水海

須田　鈴木　杉原　菅谷　新田　渋谷　篠田　佐藤　佐木　櫻田　驚本　坂田　坂本　酒巻　斉井　齋藤　斉藤　後藤　紺野　近藤　小林　小西　小ふ　高島　小玄　熊谷　小泉　北紫　菊地　菊地　河輝　金城　金杉　加藤　加藤　加瀬　鹿島　小寺　小野　小澤　小喜　岡田　大西　大木　梅津　生方　植田　伊藤　板垣　石渡　石川　飯泉

香舟　恭子　祥風　昌子　翠光　愛華　渋子　篠子　陽子　和子　龍貞　美梢　里麗　麗宛　知子　静流　翠香　早苗　喜萩　遊窓　閑風　純子　幸子　玄城　純治　紫蘭　輝子　欣子　泰峰　恵水　南汀　和敬　智子　紫峰　翠陽　雅芳　夏峰　裕子　琴翠　民子　白雅　代子　輝峯　一美　教誉　久子　子子　紅雨　悦子　青鳳　翠径　洋子　洋子

選外134名氏名略　治こ　田だ　明漢　琇韻　竹美　蓮　美紅　や　ま　玉川　竹美　玉か　あ　松村　八街　硯水　白露　幕張　千葉　蓮紅　上A I　前橋　白露　もく　光昭　澄春　千葉　京橋　紅瑤　長月　正華　樹せ　は露　白野　上久　水泉　根岸　根岸　白とみ　洞海　桂珠　一書　大草　青雲　小峰　秀映　水久　生真　桂月　立谷　精橋　や　ま　天玉　玉川　竜泉　白露

鷲山　吉野　吉田ゆ　田千　田鶴　川子　横幸　遊蘭　山佐　谷口　谷知　八裕　木橋　森紀　本舟　吉悦　木香　茂木　村翠　上佳　宮草　澤月　松秋　松子　重舟　本翠　本景　堀多　江美　別和　府幸　古信　谷子　福由　福美　富恵　井子　深子　澤子　平佳　山月　春彩　岡聡　尾華　喩春　原汀　原子　澤子　喜典　美子　梅艸　坂子　谷久　口美　野子　長子　早子　杉光　梅子　西子　中笙　中泉　中村　中林　中一　中清　西琴　中玉　西泉　豊勝　嶋　富澤　富理　村恵　谷春　脇華　晴翠　橋杜　田白　田哲　玉子　田子　香代　高子　高子　橋子　貞子　瑋子　雅泉　春原　慶子

書展

「2019竹扇会新春選抜展」を拝見して

稲垣小燕

会期＝平成31年1月16日(水)～21日(月)
会場＝いけだ市民振興財団ギャラリーギャルリ VEGA

今年の新春展は、今NHK朝ドラ「まんぷく」の舞台になっている大阪池田市で開催されました。

小伏竹村先生は、「池田」で教育長・助役を長年されていて「池田は私の第二の故郷」と伺っており、話題が集まった展覧会になっていました。

書展会場のVEGAは、阪急電車、宝塚線「池田」駅構内二階にあります。改札を出て通路を会場に向かうと、目出度い獅子舞を思わすような推薦作家の作品「賀」が迎えてくれました。一歩会場に入ると新年を寿ぐ言葉が、半折・半折½等に様々に表現された作品が整然と展示されていました。正面中央に竹村先生、小扇先生のお作、その周囲を社中の皆様で包みこむように配置されているのを拝見して新春の穏やかな温かい気持ちになりました。

竹村先生は、「池田」が教育に力を注いでいることに思いを寄せられ「育徳」と甲骨文で表現されておられ、先生の教育への熱意と深いお心に敬意の念を抱き会場を後にしました。

竹村先生、小扇先生の益々の創作活動を願い、会のご発展を心よりご祈念申しあげます。

推薦作家作品「賀」

会場風景

RUN RUN RUN猪突猛進 2019「亥・猪」現代の書と花展報告

高真会　岩上郁子

会期＝平成31年1月20日(日)～27日(日)
会場＝ライファップスクエアアイズ群馬セキスイハイム1F2F

私たち高真会（会長・真下京子）は、干支にちなんだ書道展として12年前の鼠年から開催して一巡しました。猪年となり、この干支展も最終回となりました。

〝RUN RUN RUN猪突猛進―2019「亥・猪」現代書と花〟をテーマに会員が現代の書はどうあるべきか、時代とどう向き合うかを問いつつ現代建築に書と花がマッチするようテーマに沿った作品制作を心がけ、今回はインスタレーション等を交え展示を工夫した。書の魅力を一般の方々に伝えるためオープニングイベントを企画。作家による作品解説、花のデモンストレーションを行い来場者に大変好評でした。また、12年の歩みのコーナーを設け、過去の作品や記録を展示し楽しんでいただきました。

毎年、半年前からテーマ設定、作品制作、フライヤーのデザインや文言、オープニングイベントの企画等、会員が話し合い、知恵を出し合い総力結集。その苦労が他芸術への関心や書に対する意識を高めることが出来たと感じています。

12年間の積み重ねをもとに、今後いっそう「書」を意識し研鑽していきたいと思います。

インスタレーションを交えた展示

12年間の歩みのコーナー